

研究主題

「生きる力」を育むための社会科の資質・能力を確実に育成する指導の工夫 ～三年次 見方・考え方を働かせる学習活動の工夫～

1. 主題の意味

「生きる力」とは、予測困難で、変化の激しいこれからの社会を主体的に生きるための、「知・徳・体」のバランスを備えた力のことであり、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動しよりよく問題を解決する資質・能力である。学習指導要領では、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の三つの資質・能力に整理され、各教科等で確実に達成することが求められている。この三つの力は、教科特有の見方・考え方を働かせることにより、相互補完的に育まれていくとされている。

社会科においては、変化する社会の現状や変化に対応しようとする人の営みを理解し、主体的に関わりながら、自らの生活・人生・社会をより豊かなものにしていくことが求められる。そのためには、目の前の事象から一人一人が問いをもち、見方・考え方を働かせながら問題を追究・解決していくとともに、友達や地域の方など多様な他者と協働しながら社会の在り方や自分の生き方を構想していく学びに向かうことができる指導の工夫が必要であると考えます。

2. 昨年度までの研究から

一昨年度は、「生きる力」のうち「知識・技能」の習得を中核に据え、「深い学びへ誘う学習展開の工夫」「社会的事象の見方・考え方を働かせるための「問い」の工夫」の2つの手立てから主題に迫った。その結果、資料を読み取る基礎的な力を高めたり、「どのように」「なぜ」「どうすれば」と「問い」の質を高めながら社会事象に対する理解を深めたりできた。昨年度は、「思考力、判断力、表現力」の習得を中核に据え、「問題解決的な学習展開の充実」と「見方・考え方を働かせるための価値ある「問い」をもたせるための工夫」「評価を生かした指導」の工夫の3つの手立てから主題に迫った。「問い」とは、『社会的な見方・考え方』は、課題を追究したり解決したりする活動において、社会的事象などの意味や意義、特色や相互の関連を考察したり、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の『視点や方法』である。」と学習指導要領において定義されている。そして、教師が教材や資料を準備する際には、こうした視点や方法に基づいて、「問い」を意識することが大切であるとされている。このように、「問い」を意識して学習展開を充実させ、評価の工夫を行う手立てより、子どもの思考の流れに沿った「問い」を生み出し、「問い」を追究する問題解決的な授業づくりに臨むことができた。また、社会的事象の見方・考え方を「問い」により自ずと働かせることができる「問い」により、子どもたちは事実を比較・関連させたり、事実から意味や特色を考えたりする姿が見られた。そうすることで、子どもの社会に対する認識も高まっていた。

しかしながら、「問い」をもとに、全員が自分の考えをもち、考えたことを基に深い学びにしていることや、また、個人が考えたことを広げ深め、学級全体として考えをより高次のものにしていくことで、一人一人の学びを深いものにしていくことが不十分だった。

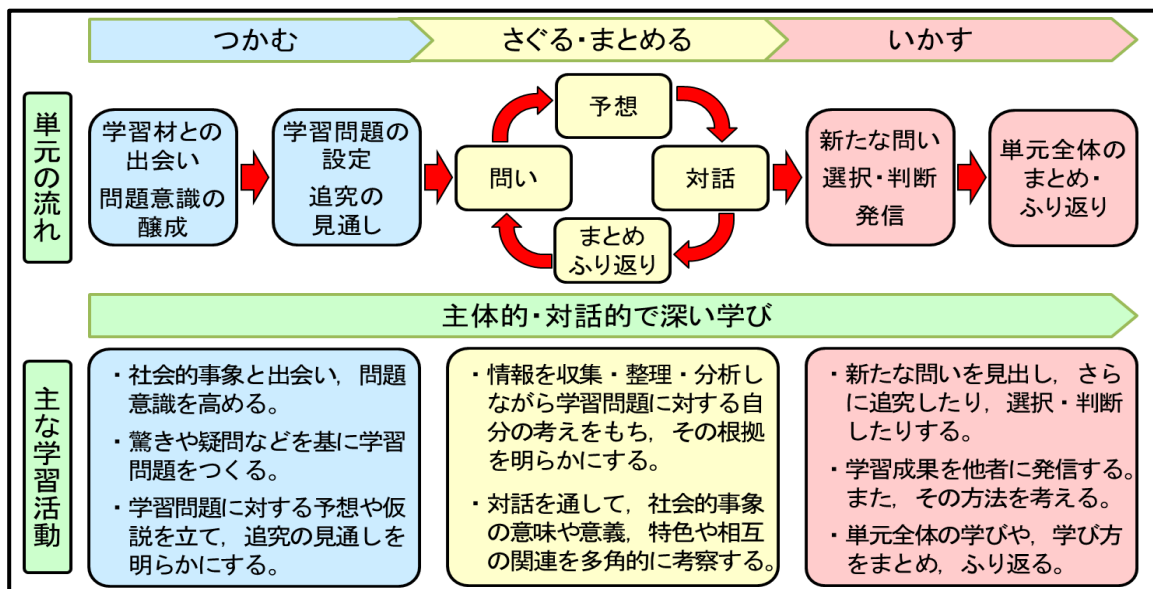
そこで、三年次となる本年度は、昨年度まで研究を生かしさらに個が考えをつくりだす活動やその考えを広め深める活動、そして、それらを踏まえて自らの考えを再構築する学習活動を通して、一人一人がより深い学びに向かうことを目指す。そのために、ねらいとする資質・能力に迫るための昨年度の手立てに加え、「見方・考え方を働かせる学習活動」に焦点をあてた研究を行っていく。

これらのことから、本年度目指すべき子どもの姿を次の3つで捉えている。

- 自ら問いをもち、社会生活について理解するとともに、社会的事象について調べまとめる技能を身に付けていく姿 【知識及び技能】
- 問いを連続・発展させながら、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたり、社会への関わり方を選択・判断したり、適切に表現したりする姿 【思考力、判断力、表現力等】
- よりよい社会の実現に向けて、獲得した知識や技能を生かして主体的に問題解決しようとする姿 【学びに向かう力、人間性】

3. 見方・考え方を働かせる学習活動の工夫とは

学習活動を設定する際は、まず、次頁の資料1のような問題解決的な学習（つかむ段階・さぐる・まとめる段階・いかす段階）になるように単元を構想する。そして、それぞれの段階で、また、段階を経るごとに子どもが事実をとらえるだけでなく、事実を基に「考えをつくり出し」、他者と共同して学び合うことで「個の考えを広げ深めて」「吟味・検討・再構築する」ことができるような学習活動を設定する。具体的には、以下のような手立てを行う。



【資料1 問題解決的な学習展開】

(1) 個の考えをつくる学習活動に資する手立ての工夫

① 見方・考え方を働かせる「問い」の構想と「問い」を子どもがもつための活動の工夫

「問い」には、子どもがもつ素朴な「興味・疑問・思い・願い」や学習問題や一単位時間の「めあて」につながるようなものまで質の違いがある。まずは、子どもがもつであろう「問い」が身に付けさせたい資質・能力を育むことにつながる価値ある「問い」に向かうように教師が「問い」を構想する。資料2のように、その「問い」をもてば、子どもがどのような見方・考え方を働かせ、どのように社会的事象について考察、構想するのかを整理する必要がある。また、単元を通して、「問い」の質がどのように高まっていくのか構想する。

〈資料2 見方・考え方を働かせるための「問い」の例〉

働く見方（視点）	具体的な視点例	考察（・）や構想（★）に向かう「問い」の例
空間的な見方 （位置や空間的な広がり視点）	地理的位置、分布、地形、環境、 気候、範囲、地域、構成、 自然条件、社会的条件、 土地利用 など	<ul style="list-style-type: none"> ・ どのように広がっているのだろうか。 ・ なぜこの場所に集まっているのだろうか。 ・ 地域ごとの気候はどのような自然条件によって異なるのだろうか。
時間的な見方 （時期や時間の経過視点）	時代、起源、由来、背景、変化、 発展、継承、維持、向上、計画、 持続可能性 など	<ul style="list-style-type: none"> ・ いつどんな理由で始まったのだろうか。 ・ どのように変わってきたのだろうか。 ・ なぜ変わらずに続いているのだろうか。 ★ どのように続けていくことがよいのだろうか。
社会的な見方 （事象や人々の相互関係視点）	工夫、努力、願い、業績、働き、 つながり、関わり、仕組み、 協力、連携、対策・事業、役割、 影響、多様性と共生 など	<ul style="list-style-type: none"> ・ どのような工夫や努力があるのだろうか。 ・ どのようなつながりがあるのだろうか。 ・ なぜ〇〇と●●の協力が必要なのだろうか。 ★ 共に生きていく上で何が大切なのだろうか。

次に、教師が構想した「問い」を子どもの「問い」にする手立てをとる。そのための手立てとしては、以下のようなものが考えられる。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもの「問い」を誘発するために、適した事象の提示 ・ 資料提示の仕方を工夫した上での資料を読み取る活動の設定（資料3参照） ・ 見学活動や体験的な活動や作業的な活動、異なる思いや考えをもつ他者との対話活動 |
|---|

必要に応じて、これらの活動と「問い」を引き出す発問をする。このようにして、教師が構想した「問い」を子どもの「問い」にし、問題解決的な学習を主体的に行うことができるようにする。

〈資料3 資料提示の工夫の例〉

	提示の仕方	働かせたい見方・考え方
かくす	<ul style="list-style-type: none"> ○ 一部をかくす。 ○ 全体をかくして、一部を見せる。 	<ul style="list-style-type: none"> ㉞ 空間的な見方、時間的な見方、社会的な見方 ㉟ 比較・分類、関連付け
アップ ルーズ	<ul style="list-style-type: none"> ○ 着目させたい部分を拡大したり、引いて全体を示したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ㉞ 空間的な見方、社会的な見方 ㉟ 比較・分類、関連付け
止める	<ul style="list-style-type: none"> ○ 映像を途中で止めて、続きを予想させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ㉞ 時間的な見方、社会的な見方 ㉟ 関連付け
並べる	<ul style="list-style-type: none"> ○ 時期が異なる同じ場所の写真（イラスト）を提示する。（江戸時代と明治時代） ○ 同時期の異なる場所の写真（イラスト）を提示する。（沖縄と北海道） 	<ul style="list-style-type: none"> ㉞ 空間的な見方、時間的な見方、社会的な見方 ㉟ 比較・分類、関連付け、総合

② 調べ、考えたことを表現する活動の工夫

子どもが考えるためにはまず見学や体験、資料の読み取りを通して事実を調べ、捉えることが必要である。また、調べたことを基に、考えをつくりノートや表現物として表す活動を設定することで、視覚化されたものを基に自分の考えを整理したり、他者に伝えやすくしたりすることができる。また、教師も子ども一人一人の考えを見取り、評価し、子どもの認識を高める

ための活動や指導に生かすことができる。

そのためには、子どもの表現活動が単なる事実の羅列や資料の書き写しではなく、事実を根拠に自分の考えをつくり出し、表現する活動になるようにする工夫が必要である。そこで、「根拠となる資料やその資料のどこに目を付け、どのように考えたのか」が分かるような表現の活動の場を設定したり、次頁資料4のような思考ツールや図表、付箋等を活用して自分の考えを可視化し、操作しながら整理したりする活動を設定する。

(2) 個の考えを広げ深める活動に資する手立ての工夫

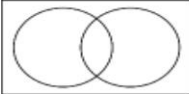

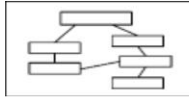
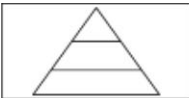
子どもが見方・考え方を働かせながら思考・判断・表現し、社会的事象に対する個の考えを広げ深めることができるように、次の手立てを工夫する。

① 調べ、考えたことを共有する活動の工夫

個の考えを広げ深めるためには、他者との対話が必要である。そのために、小グループや学級全体で調べ、とらえた事実とそこから考えたことを共有する学び合いの場を設定する。学び合いの場では、事実の出し合いにとどまることがないように、考えの根拠を交流したり、共有したりできる場を設定したり、事実同士の関係について議論したりする学び合いになるように根拠を「問い」返したり、具体化や一般化を図るように促したりする。その際、共有することの内容や順序、グループ編成の仕方を教師が意図的に計画したり、個の考えをつくる際に活用した資料4のような思考ツール、ホワイトボードやICTを活用することで思考を可視化・操作化しながら話し合ったりできるようにする。

また、教師があらかじめ子どもの考えを想定したり、授業中や授業後に子どもが表現した「個の考え」の見取りと照らし合わせて、根拠や具体化、一般化を「問い」かけたり、意図的指名をしたりする。

〈資料4 思考ツール例〉

主な思考スキル	期待する思考	効果的なツール
比較する	ものの特徴をとらえたり、よさや問題点をはつきりさせたりする。 同じところを見つけることと違うところを見つけることの二つの側面がある。	ベン図など 
分類する	似たもの同士を同じ類型に入れて他のものと区別し、特徴を明確にする。 新しいものを理解するために、それまでにもっていた枠組みに当てはめて考える。	Yチャートなど 
関連付ける	複数の情報をつなげて、1つずつのときには見えなかった、特色や傾向、意味などを考える。 拡散的な思考（広げる）と収束的な思考（まとめる）の両方がある。	コンセプトマップなど 
総合する	具体的な事実や情報を基に、それを組み立てながら共通点や規則性、傾向などを探り、まとめる。 物事のしくみや構造が見えやすくする。	ピラミッドチャートなど 

② 見方・考え方の働きをより活発にするために考えを再構成する活動の工夫

個の考えを共有したり、この考えについて議論したりする学び合いを通して多くの子どもは問題の解決に向かうことが考えられる。しかし、他者の考えを安易に受け入れてしまったり、議論が不十分さや考えの偏りがあったりすることで社会的事象の一側面にしか着目

できていない場合や自己の考えの広がり深まりが自覚できていない場合がある。そこで、再度、子どもが見方・考え方を働かせ、さまざまな側面から「問い」について考えたり、自己、他者の考えを吟味・検討したりした上で「問い」の解決に向かうことができるようにする。

そのために、一単位時間のめあてや学習問題に対する考えを一単位時間の終末あるいは単元の「いかす」段階において、再構成する場を設定する。その際、自分の考えの変容やその過程について「初めの考え」「学習後の考え」「変容の理由」を明らかにしながら、表現する活動を設定する。また、状況に応じて教師がさらなる事象を提示したり、揺さぶりをかけたりすることで、事象に対する新たな「問い」や焦点化した「問い」を設定し、再度小グループや学級全体で話し合う活動を設定する。

4. 研究構想図

